

【 9 】

氏 名 (本 籍)	藤 井 和 枝 (東京都)
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	博 甲 第 161 号
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 58 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
審 査 研 究 科	心 身 障 害 学 研 究 科 心 身 障 害 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	精 神 遅 滞 児 の 分 類 課 題 学 習 に 関 す る 研 究 — 特 に 類 概 念 の 幼 児 ・ 児 童 期 に お け る 発 達 と そ の 形 成 に つ い て —
主 査	筑 波 大 学 教 授 医 学 博 士 長 畑 正 道
副 査	筑 波 大 学 教 授 教 育 学 博 士 小 林 重 雄
副 査	筑 波 大 学 助 教 授 中 司 利 一
副 査	筑 波 大 学 助 教 授 遠 藤 昭 彦
副 査	筑 波 大 学 助 教 授 杉 原 一 昭
副 査	筑 波 大 学 助 教 授 教 育 学 博 士 市 村 操 一

論 文 の 要 旨

従来の研究では、中軽度の精神遅滞児(以下、遅滞児とする)は、分類課題において、同MAの正常児と同程度に分類が可能であっても、分類理由の言語化で遅れを示すと言われている。しかし、概念化での、とくに、言語的使用での遅れの原因については、自発的教示の劣弱性に求めた研究があるだけであり、概念化での遅れをいかに援助するかを検討した研究も見あたらない。また、発達段階が進んでから見出されるようになる遅滞児の遅れの原因を、前概念的な段階に求めた研究も見あたらない。そこで本研究では、遅滞児の前概念的な段階からの概念形成過程における特性を、分類課題の遂行を規定する幾つかの要因を取り扱うことにより検討し、発達段階に適した援助を明らかにすることを目的とする。

第1実験系列(第1～第2実験)では、提示刺激数(第1実験)と手がかり提示(第2実験)が、絵カード分類課題に及ぼす効果から、遅滞児の概念形成過程における特性を検討した。分類課題には、果物、動物、乗物の3つの類から成る絵カードを使用し、提示刺激数は、9、15、21枚と変化した。

MA5-6歳段階の遅滞児には、同MAの正常児と比較して、刺激数が少ない場合に、類に分類しても理由不明の表象が多いことから、直観的な思考をしていた者が多いと言えよう。MA7-8歳段

階の正常児は、刺激数の影響を著しく受けるが、刺激数が少なくても概念的な分類操作をする者が、遅滞児に比べて多いことから、直観的な思考段階から概念的な思考段階への移行が進んでいると言えよう。類に分類できないMA 5—6, 7—8 歳段階の正常児には、手掛りがあれば分類原理を転換できる可塑性のある者が多いが、遅滞児には、概念的な分類原理を持っていたとしても原理を転換できない者が多く、とくにMA 5—6 歳段階では、色に固執する傾向が強いため、分類原理の転換が妨げられることが明らかになった。MA 9—10 歳段階の正常児は、刺激数の多少にかかわらず、概念による分類操作を行なう段階に至っていたが、遅滞児は刺激数の影響をうけ、概念的な分類操作と同時に直観的な分類操作も行なっていたと言えよう。

第2 実験系列（第3～第4 実験）では、どのMA 段階になれば、3 次元事物から抽象した情報を、絵カード分類課題遂行に適用できるか、分類課題に及ぼす材料の効果から検討し（第3 実験）、果物等のミニチュアによる3 種類の先行経験が、絵カード分類課題に及ぼす効果を検討した（第4 実験）。

MA 2—3 歳段階では、2 次元刺激事物から適切な情報を得て分類課題を遂行するのが困難で、遅滞児ではとくに困難であった。両被験児群とも、絵カードではMA 3—4 歳段階から、3 次元事物ではMA 2—3 歳段階から、類を基準とした完全分類が可能になり始めることが明らかになった。

MA 3—4 歳段階の正常児では、自由な接触活動における事物の性質や機能を生かした事物の取り扱いが、事物の特性を抽象するよう作用し、分類課題の遂行が最も促されたが、遅滞児では、事物の性質や機能の抽象には至らなかった。これは、遅滞児の内的活動が希薄であったためと示唆された。他の2 条件は、正常児では、類に完全分類できても分類基準を適切に言語化できない者に対して表象を促し、遅滞児でも、比較的強制的な場面となるため、正常児と同様な効果が見出された。MA 5—6 歳段階の正常児では、視覚的探索が事物の特性を明確にし、分類課題の遂行を促し、他の2 条件も効果があった。遅滞児では、分類できても、分類基準を適切に言語化できない者に対して、言語的指示が効果を及ぼし、分類基準を記号象徴的に表象できるまで促していた。遅滞児では、MA 5—6 歳段階に比べて、MA 3—4 歳段階の方が、先行経験の効果が大きかった。

第3 実験系列（第5～第7 実験）では、第1 実験系列で見出された遅滞児の概念化での遅れの一因を、遅滞児の類の名辞と内包と外延との対応関係の理解の仕方に求め、分類課題で用いられた類の名辞を定義させることにより検討した（第5～第6 実験）。さらに、第7 実験では、視覚、自由な接触活動、言語による先行経験が、類の名辞と内包と外延の対応関係の理解に及ぼす効果を検討した。

MA 2—3 歳段階では、約半数が類の範囲を把握するに至っておらず、類間の区別がはっきりせず、遅滞児ではその傾向が著しかった。MA 3—4 歳段階になると、両被験児群とも、類間のあいまいさは減少して内包の理解があらわれ始め、MA 4—5 歳段階になると、類間の区別がはっきりしてきて外延の理解が進む。その後、正常児ではMA の推移と共に概念の内包の使用が著しく進み、とくにMA 5—6 歳から7—8 歳段階にかけて、類の名辞と内包と外延との対応関係が確実になっていく。一方、遅滞児では、外延の使用に傾き、内包の使用が正常児に比べてMA 2—3 年前後遅れ、そ

これらの対応関係が確実になるのは、MA 9—10 歳段階以後と推察された。このような類の名辞、内包、外延の構造化での遅れが、概念化における言語的使用の遅れをもたらすと示唆されよう。

MA 3—4 歳段階では、自由な接触活動が、正常児に対しては、不完全だが類の内包の理解を促すよう作用した。遅滞児に対しては、外延の使用を促すが、類の内包の理解にはほとんど効果がないと言えよう。視覚的探索も、MA 3—4 歳段階の遅滞児には、外延の理解を促していた。言語的教示は、両MA段階の正常児には、類の理解を最も促していたが、遅滞児に対しては、ほとんど類の理解を促していなかったと言えよう。遅滞児では、類の内包と外延の対応関係の把握に対する先行経験の効果は、MA 5—6 歳段階に比べて、MA 3—4 歳段階での方が大きかった。

以上のように、MA 5—10 歳段階の遅滞児は、類の名辞や外延をもっているが、正常児と比較して個々の知識の所有に傾き、類の名辞、内包、外延が互いに結合し構造化されて、対応関係が確実になるのが遅れていく。そのために、分類課題における概念的な操作が遅れ、正常児に比べて直観的な思考をして分類する傾向が強くなり、概念化における言語的使用も遅れてしまうことが示唆された。

次に、類概念の獲得、形成を促すための先行経験の効果を見ると、MA 3—4 歳段階の遅滞児では、自由な接触活動は、事物の特性の抽象を促さないが、外延の理解を促していた。視覚的探索は分類を促し、言語的教示とともに、分類理由の言語化にも効果があった。MA 5—6 歳段階では、類に分類できても分類基準を適切に言語化できない遅滞児に対して、言語的教示が分類理由の言語化を促していた。遅滞児では、先行経験の効果は、MA 5—6 歳段階に比べて、MA 3—4 歳段階の方が大きいことから、前概念的な段階からの概念発達段階に適した指導の重要性が示唆された。

審 査 の 要 旨

本論文は、精神遅滞児の前概念的な段階からの概念形成過程における特性を、分類課題の遂行を規定するいくつかの要因を取り扱うことにより検討し、発達段階に適した援助を明らかにすることを目的とした研究である。

MA 2—3 歳からMA 9—10 歳の中軽度の精神遅滞児を対象とし、同MAの正常児と比較検討した。分類課題として絵カード（果物、動物、乗物の3つの類）を用い、一部の実験では同じ類のミニチュアを用い、絵カードの分類との比較を行なった。任意分類で要素の数を変化させると、MA 5—6 歳の精神遅滞児では正常児に比べ、少ない刺激数の分類で理由不明の表象が多く直観的な思考をしていた。また「3つに分類しなさい」という手掛りを与えても、MA 5—6 歳の精神遅滞児は色に固執し分類原理の転換が妨げられた。両被験児群とも絵カードではMA 3—4 歳から、ミニチュアではMA 2—3 歳から完全分類が可能になりはじめた。ミニチュアを用いて、視覚的探索、自由な接触、言語的教示、の3種の先行経験を与えて分類させると、MA 3—4 歳の正常児では自由な接触が分類課題の遂行を促したが、精神遅滞児では他の2条件の方が分類基準を適切に言語化できない者

の表象を促した。MA 5—6 歳では精神遅滞児に於て言語的教示により言語化できない者に効果を及ぼし、MA 5—6 歳に比べMA 3—4 歳の方が先行経験の効果が大きかった。分類課題の類の名辞を定義させると、正常児ではMA 5—6 歳以上になると概念の内包の使用が著しく進むが、精神遅滞児では外延の使用に傾き内包の理解が遅れた。しかしMA 3—4 歳の精神遅滞児に対して視覚的探索と自由な接触が外延の理解を促した。このように精神遅滞児に対し前概念的な段階から概念発達段階に適した指導の重要性が示唆された。

以上のように、本研究は分類課題を用いて精神遅滞児の幼児・児童期の類概念の発達を同MAの正常児と対比しつつ細かく検討した研究である。これまで精神遅滞児の概念形成過程を前概念的な段階から検討した研究は見当らず、本研究の意義は大きい。しかし本研究で用いた教示は概念形成に対して、精神遅滞児には正常児ほど効果がなく、今後の課題として残されている。

以上の諸点を総合して、本論文は教育学博士論文に値するものと判断される。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。